

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成 21 年度の問題作成に当たっては、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の目的と性格及びその役割を考慮し、従来の方針を継承しながら、現行の高等学校学習指導要領の理念にそって、可能な限り新味を加えつつ受験者の学力を検出できるように配慮した。また、論理的思考力と感受性をバランス良く兼備した学力の重要性を考慮し、その達成度を判定できるものとすることを目指した。

以下は、問題作成部会として特に留意した点である。

- (1) 問題は昨年と同様に 4 問とし、「近代以降の文章」から評論と小説各 1 問、「古文」1 問、「漢文」1 問の配列とし、200 点（各 50 点）の配点、80 分の問題とした。
- (2) 出題の範囲は、高等学校教育における新教育課程の実施を踏まえて、「国語総合」「国語表現 I」の教科書レベルとし、受験者の基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、受験者の思考過程にそった設問及び設問形式となるように工夫し、各設問の難易度がバランスのとれた問題となるように考慮した。第 1 問は現代の評論を、第 2 問は現代の小説を、それぞれ素材に選んだ。
- (3) 問題の構成は、高等学校の国語教科教育の実態に即して、基礎的かつ基本的な学力が検出できるものとなるように配慮した。また、受験者の文章読解や思考過程の流れにそう問題構成となるように工夫し、難易度においてバランスのとれた設問構成となるように考慮した。
- (4) 問題文、設問、リード文及び各選択肢の吟味には細心の注意を払うとともに、基礎的言語能力・認識力・想像力・判断力を含む総合的な国語能力を問うものとなるように工夫し、論理的な思考力と感性的な鑑賞力及び国語表現能力も判断できるように配慮して問題作成に当たった。平成 21 年度の受験者は、昨年より約 4000 人増えて、約 48 万 5000 人、平均点は約 6 点下がって、115.46（57.73%）であった。センター試験は各科目の平均点 6 割を目安としているから、これは昨年度よりはやや下回るものの適切な難易度を示す数字であると言えよう。

2 各問題の出題意図と解答結果

問題ごとに、問題文の選定と出題意図や工夫を述べ、併せて受験者の解答結果を踏まえた試験問題に関する考察を述べる。

第 1 問 政治社会学者である栗原彬の文章。『現代思想』（青土社、1984 年 4 月号）所収。全 IV 章のうち、I～III 章部分を出題。近代市民社会に生きる人々が、現実に適応すると同時にアジール（避難所）を指向している様相を、子どもの遊びである「かんけり」をテーマに考察した文章である。隠れん坊の変種「複数オニ」「陣オニ」が、隠れん坊が内包していた擬似的な死と再生の経験を喪失し、同じ身体ゲームの系譜にある「高オニ」「人生ゲーム」とともに、私生活主義と競争民主主義に特徴付けられる市民社会への適応訓練になっていると述べ、それとは異なる相互的共同性に満ちた世界を引き寄せるのが「かんけり」と論じている。小学生の少年の肉声を取り入れるといったユニークな文章の特徴があり、表現も平易、論旨・論理展開も

明快であり問題文とするにふさわしいと判断した。各設問では、従前どおり論旨の展開に即して基本的な文章読解力を問うている。本文は、約 4400 字。

問 1 基本的な漢字知識とともに、傍線部前後の文脈への理解力を問う設問。(イ)・(オ)の正答率が高めであった。一方、(ア)・(ウ)の正答率が低く、日常的に用いる言葉だけではなく、文章語に用いられる漢字知識力がある者とそうでない者との差が出た。

問 2 普通の隠れん坊と「複数オニ」「陣オニ」との違いは何か。近代市民社会の特徴を問題にするための導入を筆者がどのように行っているかを問う設問である。正答率はやや低め。論の前提となる素材の理解を概説している部分だが、冒頭の基本的な読み取りができていれば解答できるものと考えられる。

問 3 「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」、そして「人生ゲーム」と、それぞれの遊びをどのようにとらえることで筆者がこの 1 文を導いているかを問うた。直後にある筆者の解説よりは、傍線部直前の内容や論理展開の理解を重視した設問。正答率が高めであった。誤答は④が 1 番多く、これは筆者が子どもたちの「経験」を話題の中心としていることを、前後の文脈から読解できていなかったためと思われる。

問 4 「飽きることに飽きてしまう」という言い回しが持つニュアンスを理解できているかを問う設問。特に再び子どもたちが戸外に出てくるとき、単に回帰するのではなく、より本質的な変化が生じてのことであるという筆者の説明が理解できているかを問うた。傍線部を含む段落の理解を問い、部分的な理解にとどまるのではなく、広く文章を把握する力を試した。正答率はやや低め。一番多い誤答は①。これは単純に子どもたちの行動を段階的に説明しただけの選択肢であり、正答では、それぞれの段階で、どのような条件下にある子どもたちが存在する可能性があるのか、といったもう一つ高次の話題が展開されているので、そこまで及んでいる②が最も適当。粘り強い読解を必要とするため、読解力の差を試すのに適切な設問箇所であったと考える。

問 5 文章後半では、「かんけり」が、「かんを蹴る」行為、「隠れる」行為、仲間を助ける行為にわたって論じられているので、その内容を正確に理解しているか、さらに、社会への復帰の有無という観点から、普通の隠れん坊と「かんけり」との相違を問うことで、全体のまとめの問題とした。正答率は、やや高めであった。誤答は②を選択した者が多く、これは冒頭の従来の隠れん坊に関する説明にとどまっており、問題提起と結論という基本的な論理的文章の構造が理解されているか否かが正答を選ぶ際に大きく作用したと考えられる。

問 6 本文における「引用（藤田省三の論、小学六年生から聞いた話）」の意図や効果、及び、本文における「題材」と「主題」の関係についての理解を問う問題である。正答率は平均的であり、表現の特徴を問う設問としては適切な難易度であったと言える。

第 2 問 本年度は、加賀乙彦の短編小説「雨の庭」（初出「文学界」1971 年 6 月、初刊『雨の庭』197 年 6 月、湯川書房）からの出題であった。作品全体は、6 月下旬のある雨の日、既に人手に渡って 3 月ほどたった旧居に「彼」が赴く場面から始まり、数日後に再度訪れ、家が完全に壊されていることを見届ける場面で終わっている。作品後半部に「彼が忘却してしまったことを家が記憶している」という一節があるが、廃屋と化した家は「彼」にとってまさに忘却の淵^{ふち}からかつての記憶を呼び戻す回想の源泉であり、その回想的世界の重層的な構成によって、「彼」

や「彼」の父、「彼」の家族たちが築き上げてきたその家の長い歴史が見事に作品内に凝縮されている。

出題箇所は作品前半部、引越しの準備がほぼ終わり家族でサヨナラ・パーティをしたときの回想から、「彼」が雨の庭に立って燃えさしの家財を眺めている現在の時間に戻ってくるまでの部分である。ここでは、一家を背負ってきた「父」とその後を引き継ぐ息子の「彼」が家に対して抱く深い愛着やその他の家族の家に対する様々な思い、そのような愛着や思いを抱く家族相互の人間的なかわりの様相が、抑制された精妙な筆致で淡々と描かれている。重層的に展開される回想場面の内容を時間的に整理し、それがどのような関係性を持っているかを的確に把握することが、「彼」や父の心情の内実、あるいはそのような心情の生ずる理由を理解するための前提となっている。このような特質を持つ問題文は、慎重で精密な読みを要求する側面もあるが、内容的に見れば必ずしも難解なものではない。以上のような観点から、小説の読解力を測るに適切な問題文であったと判断される。

問1 本文中の語句・表現について文脈を踏まえた上での意味把握ができていないかを問う問題を設定した。正答率では(ウ)が目立って低かった。あまりなじみのない和語を含む慣用表現が難度を高めた可能性もあろう。

問2 引越しの準備がほぼ完了し開催されたサヨナラ・パーティの場面で一人その喧騒とは「終始無縁」であった父の心情を考えさせることで、父と家とのかわりについて読み取らせることを意図して設問した。ただし、父の心情が直接的に語られている箇所はないので、「彼」の目から見た父の様子、「彼」の回想の中で語られた父の半生、父が今置かれている状況を踏まえることを前提として「彼」が想像し得る父の心情を問うという形式にした。正答率は全体から見ると比較的高かった。

問3 家財を焼却する父を手伝う場面で「彼」が父に対して「不思議に親密な思い」を抱いた理由を、父の老化という身体的な変化のみでなく、その父の人生遍歴を踏まえつつ読み取らせることを意図して設問した。正答率は全体から見ると比較的高かった。

問4 土地を購入する側の人間との対外的なやり取りの場で、はからずも庭木についての個人的な思い出を語ってしまった「彼」の、自身への反省的な意識を読み取らせることを意図して設問した。庭木についての回想は、「彼」の心の奥にある家への愛着の反映でもあるので、その点に目を向けさせて次問へとつなげる意図もあった。正答率は全体から見るとかなり高かった。

問5 家財を焼却する場面で、「彼」が「空しさ」を覚えた理由を傍線部直前の「狂暴な衝動」を踏まえて読み取らせることを意図して設問した。「狂暴」な破壊への「衝動」は、前問で目を向けさせた「彼」の心の奥底にある、父とも共通する家への絶ち難い愛着の念が父と対照的な形で表されたものである。比較的難度の高い設問であると思われたが、正答率は全体から見ると平均的であった。問5への布石の意味合いも込めた問4が相応に機能したと思われる。

問6 本文における「語りの視点」、「時間の構成と展開」、「文末表現」、「描写表現」、「会話表現」など、小説における表現上の特徴についての理解を問う問題を設定した。正答率は全体から見るとやや高めであった。表現の特徴を問う設問として基本的な問題であったと言える。

第3問 作者不詳の室町時代の物語『一本菊』の冒頭近くの一節。王朝の物語におなじみの展開で、皇子が臣下の妹である美しい姫を見初めるという内容に、複数の和歌が織り込まれている。今回出題した部分は、中古の物語を模した擬古文で、高等学校の古典に親しんでいれば、容易に読みこなすことができる文章である。設問では、主人公の兵部卿宮が、臣下で兵衛佐の妹を見初めるが、和歌を贈っても返事がなくて落胆し、それでもあきらめられずに直接出向いて行く、という心情の動きや、それを取り持つ宮の隨身の常磐の気持ちなどを正確に読解することを柱に、基本的な語い、文法事項、和歌の技法など、できるだけ幅広い古典読解の力を確認することをねらった。問題文の分量は、ある程度物語の展開を取り込もうとしたため、例年よりも若干長めとなってしまったが、高等学校の古典になれ親しんだ受験者には入りやすい内容であるためか、全体の得点率は5割強と毎年の揺れの範囲内であり、適切な難易度であったと思われる。

問1 (ア)は「あはれ」が感動詞であり、「ばや」が願望の終助詞であること、(イ)は「なべてならぬ」という連語の意味を尋ねる。(ウ)は「いかにして」が疑問を表すことと、「思ひ召し寄る」が「思ひ寄る」の最高敬語であることを尋ねる。(ア)、(イ)の正答率は比較的高かったが、(ウ)は半分程度だった。難易幅広く出題するという観点からすれば、最初の表現解釈の問題が得点しやすかったことは適当なことであったと思われる。

問2 3種類の敬語の働きが、だれからだれへの敬意かということも含めて、それぞれきちんと理解されているかということ、文の主語や目的語・補語に当たる人物はだれか、また会話文はだれがだれに話しているのか、という文章の理解と絡めて尋ねている。敬語の種類だけでなく、だれからだれへという敬意の方向まで尋ねるという複雑な設問であったが、正答率は5割弱で決して低くはなかった。受験者の敬語に関する理解はそれなりにできているのであろう。

問3 和歌に関する国語表現の問題で、掛詞や序詞などの修辞技法を中心に、3首ある和歌に用いられている表現技法を尋ねている。第3問の中では、3割強と最も正答率が低かった。誤答を選択させるという設問の作り方もかかわっているのかもしれないが、学校教育では、掛詞や序詞などという和歌用語やその代表的な和歌は学んでも、受験者は、その意味や働きについては必ずしもきちんと理解していないということなのかもしれない。

問4 問4、問5は、第3問の中心となる、主要登場人物である兵部卿宮とその隨身の常磐の心情を問う問題である。常磐は兵部卿宮の隨身として狂言回しの役割を担っており、何度も宮の和歌を兵衛佐の妹に届けさせられるが、その妹や女房たちに拒絶される。そのときの常磐の気持ちは傍線部Aの上の会話文を含む一節を参考にすることになるが、そこにある「ねたし」「めざまし」「便なし」などの語の解釈を正しく行わなければならない。そのような難しさがあると思われたが、正答率は6割弱と低くはなかった。

問5 この文章の読解の中心となる、兵部卿宮の心情の移り変わりを尋ねる問題。全体として物語の流れがとらえられているかを尋ねる。それほどややこしい選択肢ではないにもかかわらず、文章全体を正しく読んでいなければ解答しにくい選択肢となっているが、正答率は6割強とそれほど低くはなかった。問4、問5の正答率からすると、例年より長い問題文ではあったが、受験者は筋の展開をおよそ過たずに追って行っているものと思われる。古文の文

章としては親しみ深い王朝物語は、受験者にも物語の世界に入りやすいということなのだろう。

問6 問1～5に抵触しない問題文の部分に関して、この文章の筋立てが正確につかめているかを確認する問題である。問題文の様々な箇所について尋ねており、また、選択肢によっては紛らわしいものも含まれていたにもかかわらず、正答率は3割半ばであり、この文章がきちんと読めている受験者は正答できたように思われる。

第4問 「呉王は西施の色香に惑わされて国を滅ぼした」との俗説に反駁を加え呉越興亡の歴史について論じているが、ただ単純な史論ではなく、「呉が滅びたのは他国への過度の出兵のためである」との侯方域の主張は、現代の平和問題を考える際にも有益であり、古典と現代を通底するテーマを有していると考えられる。冒頭で自己の主張を明確に打ち出し、歴史的事実を列挙して主張の正しさを論証し、さらに苻堅を例にあげて類推（アナロジー）という形で議論を進める。最後には格言を引いて主張を補強する。まさに評論文として優れた作品であり、こういった議論の展開の構造を理解できるかが、読解の鍵となる。ただし、本文が長く注も多く、受験者にとっては読解と解答に時間のかかる問題になったようである。また、全体の得点率も低くはなく、得点分布にも顕著な偏りは見られないので、受験者の学力をほぼ適正に測ることができたと判断される。

問1 漢字の意味を問う問題。それぞれの漢字が文中でどのような意味で用いられているか、核となる漢字「寧」「類」を2字の熟語に置き換えてみたり、前後の文脈から判断すれば、正答を導くことができる。いずれも基本的語いであり、高等学校における基本的な学習を確認する問題である。正答率も出題者として想定していたものであった。

問2 (i)で書き下し方を、(ii)で解釈を問う問題。(i)・(ii)とも「帰」「過」のこの文脈での意味がまず問われ、次に作者の主張を把握できているかが問われる。問題文全体の理解にもつながる問題である。(ii)の方が正答率が高く、(i)が④の誤答を選択した者が多く、正答率が低くなった。書き下し方をしっかり勉強しておく必要性が確認できる。

問3 行為を表す語句の行為の主体を問う問題。古文も漢文も省略された主語を自らが補いながら読むのは大切な作業である。前後の文脈を正しく理解しているか、「而（しか）れども」という接続詞によって主語が変わっていることを理解できているか、読解能力や基本的語いの働きを問う問題である。選択肢の工夫については「(ア)が分かれば(イ)で答えが決まってしまう」との指摘を受けたが、受験者の中では(ウ)の選択で間違えている者も多く、その指摘は現実的には当たっていない。正答率も出題者として想定していたものであった。

問4 第2段落の議論の展開の仕方を表現上の特徴から問う問題。第2段落では歴史的事実が漸層的に述べ連ねられ、第1段落で提示された「西施が呉を滅ぼしたのではない」との主張を論証している。このことが理解できているかを問うとともに、それぞれの文同士つながりや表現上の連関が理解できているかも問う。新傾向の問題であり、設問に加えられた工夫については高く評価されているが、正答率は低かった。受験者は新傾向の問題に対応できなかったのであろう。疑問・比喻・反語など漢文の基本句形や故事成語などをまずしっかり学習して、さらに応用できるようになってほしい。

問5 筆者の主張の根拠を理解しているかどうか問う問題。筆者がここでなぜ苻堅を例にあげ

て類推（アナロジー）という形で議論を進めているのか、まず理解できているかが問われる。筆者の主張の最も核心的な部分に関係するので、呉王と苻堅はどういう原因で同じ道をたどることになったのか、正しく把握できているかを問う。筆者の主張の根拠を理解しているかどうか問う問題なので、本文を丁寧に読めば正答にたどり着けるはずだが、正答率は高くはなかった。苻堅を例にあげて具体的に類推を進めていく手続きに対応できなかったのであろうか。

問6 最後に格言を引用する、その意図を問う問題。まずこの二つの格言を字義どおりに理解できているかが問われ、次にこの格言が問題文の中の具体的事例とどのように対応しているのか、理解できているかが問われる。格言の字面だけを理解しただけでは①や③を選んでしまい、また「必不可易」をきちんと理解できなければ正答にたどり着けないので、正答率の低い難解な問題になるか、と危惧もされたが、結果は正答率は低くはなく、出題者として期待していたものであった。

ただ、問6の配点が10点で高く、1問で漢文の第4問全体の2割を占めるのは問題であるとの指摘を受けた。第4問で最も重要な問題ではあるものの、確かに、問1の枝問の配点を高くすれば、問6の配点を8点にすることもできたはずなので、この点については今後の問題作成の際に注意しなければならないであろう。

3 おわりに

すべての大問の中に表現に関する設問を必ず含むという新しいスタイルは教育現場においても広く認知されたが、これまでの成果を踏まえ、一層の洗練が求められている。評論では身近な題材から現代社会のあり方を問う出題文が反響を呼んだ。全国の高等学校教育に対する影響力の大きいセンター試験である。安定した難易度の維持に心掛ける一方で、マンネリズムに陥ることなく、教育現場に新鮮なメッセージを送り続けることの重要性を痛感している。